

他の考えの意図を理解し 自分の考えを深めていく学習

山下 亜寿佳

1 条件設定に当たって

子どもは自分の考えと違う考えに出会った時、「どうしてだろう」や「なぜだろう」と疑問に感じる場合がある。その場合には、相手の考えの意図を知りたいという気持ちが含まれている。互いに考えの意図を話したり聞いたりすることで、互いの考えの意図を理解し合うことができる。話したり聞いたりするかかわりの中で、それぞれの考えに深まりが見られるだろう。しかし、疑問に感じない場合もある。それは、自分の考えと違うことで不安に感じたり、相手の考えに関心がもてなかったりしていると考ええる。そのような場合では、自分の考えに変容はなく、考えの深まりは見られない、また、互いの考えについて話したり聞いたりするかかわりも見られない。

そこで、他とかかわりながら自分の考えを深められるよう「他の考えの意図を理解し 自分の考えを深めていく学習」とテーマに掲げ、条件を三つ設定した。ただし、三つの条件に順序性はない。

- ・条件A 課題に対して 意欲的に追求していること
- ・条件B 試行や比較を繰り返し 自分の考えを見つめ直していること
- ・条件C 友達の考えを肯定的に受けとめ その考えに反応していること

2 条件について

・条件A 課題に対して 意欲的に追求していること

一人で課題を解決できそうで解決できそうにない課題が設定された時、子どもはこれまでの経験や知識を生かして課題を解決しようとする。そこで、一人で解決することができれば、課題を解決することができたという成功体験から、次の学習への自信につながり、意欲をもって学習に取り組んでいくことができるだろう。しかし、一人では解決できない時、解決しようとする意欲があれば、子どもは友達に話したり聞いたりして解決につなげていくだろう。そこには、かかわりの必然性が生まれる。必然性のあるかかわりは、互いの考えを知ろうとしたり、よりよい考えを導き出そうとしたりする話し合いにつながる。そこでは、互いに話し合いながら課題を解決していくと考える。

・条件B 試行や比較を繰り返し 自分の考えを見つめ直していること

自分の考えをより深めていくためには、一度考えたことを再び見つめ直す必要があると考える。それは、一度考えただけでは、その考えが妥当であるかどうか一人では判断できないからである。そこで、自分の考えを試したり他の考えと比較したりする中で、自分の考えに対しての気づきが生まれていく。その気づきを生かして、自分の考えを見つめ直すことで、自分の考えの妥当性が分かり、自分の考えに深まりが見られる。そのような経験を繰り返していくことで、他とかかわることのよさを実感し、自分の考えを深めていくことができるだろう。

・条件C 友達の考えを肯定的に受けとめ その考えに反応していること

話し合うためには、自分だけでなく、話したり聞いたりする相手がいる。話し手と聞き手が肯定的な人間関係であれば、互いに相手の考えを受けとめたり、その考えに反応したりすることができる。また、自分の考えに自信が持てない場合においても、肯定的な人間関係であれば、自分の考えを受けとめてくれるだろうという安心感から、自分の考えを安心して話すことができるだろう。また、肯定的に受けとめてばかりではなく、その考えに反応し、肯定的な考えや批判的な考えを伝えることで、自分の考えを深めていくことができると考える。そして、次の学習においても、肯定的な人間関係のもと、自分の考えをより深めていこうとする姿が見られると考える。

3 おもな実践

6年1組では、年間を通して「6－1運動会」を計画し、体ほぐし運動や体づくり運動に取り組んでいる。「6－1運動会パート2～体ほぐしの運動 体力を高める運動編～」では、授業の前半10分間に個々で体力を高める運動の「チャレンジ10運動」、その後にグループで体ほぐしの運動と体力を高める運動の「バランスボールリレー」に取り組んだ。「チャレンジ10運動」では、10種類の運動を一人一人がカード(資料1)を持ち、できた運動の欄にチェックをしながら運動に取り組んだ。「バランスボールリレー」では、6人グループで、三種類のボール運びリレーを行なった。

これから、「6－1運動会パート2～体ほぐしの運動 体力を高める運動編～」の実践を中心に、条件A・B・Cについて述べていく。

・条件A 課題に対して意欲的に追求していること

追求意欲をもたせるために、子どもにとって初めて経験する動きがあり、グループごとに工夫が考えられる課題を設定した。初めて経験する動きがあるということは、個人差が少なく、全員が共通のスタートラインに立つことができる。また、グループで工夫を考えられるということは、他のグループの動きを意識することができる。そこで、課題解決に向けた話し合いが、グループごとに活性化していくのではないかと考えた。

「バランスボールリレー」では、「より速くボールを渡す体の動かし方を考えよう」と課題を設定した。課題解決に加えて、どのグループも「勝ちたい」という思いから、ボールの渡し方について話し始めた。初めてバランスボールをさわる子どもが多く、どんなボールの渡し方ができるのか話し合ったり動きを試したりしていた。その中で、ボールの渡し方にもいろいろな渡し方があることに気付いた。足から足へとボールを渡すリレーでは、ボールが頭の上を通る渡し方(写真1)やボールを床に対して水平に動かす渡し方(写真2)などに気付いていた。

その気付きから、グループごとに渡し方を選択し、より速くボールを渡すことに焦点を当てて話し合う姿が見られた。その話し合いでは、グループのメンバーによって渡し方を選択するグループとグループで渡し方を統一するグループに分かれた。渡し方を選択するグループでは、メンバーの並び順についても話し合い、前後の子どもで互いの渡し方を確認し合っていた。また、渡し方を統一したグループでは、ボールを確実に渡せるようにボールをはさむ足の位置を確認したり、リズムよく渡せるように声をかけ合ったりしてボールを渡す姿が見られた。グループごとに、より速い渡し方を考えることができた。

今回、バランスボールを初めて使う子どもが多かったため、体育を得意とする子どもの感想に「大きなボールを使ってリレーをするのは初めてで、とても難しいと思いました。」とあった。子どもにとって、初めて経験する動きは不安に感じることもあるが、これまでに経験した動きを生かして動いたり、グループで課題を解決したりすることで不安が解消され、グループでの追求意欲につながったと考えられる。また、リレーが三種類あるということで、一つ課題が解決できると自信につな

運動	6/10	6/18	6/22	6/23	1	1	1
① バランスボール	◎	◎	◎	◎			
② かみそり運動	◎	◎	◎	◎			
③ かみそり運動	◎	◎	◎	◎			
④ 運動	◎	◎	◎	◎			
⑤ 運動	◎	◎	◎	◎			
⑥ 運動	◎	◎	◎	◎			
⑦ 運動	◎	◎	◎	◎			
⑧ 運動	◎	◎	◎	◎			
⑨ 運動	◎	◎	◎	◎			
⑩ 運動	◎	◎	◎	◎			

資料1 チャレンジ10運動のカード



写真1 ボールが頭の上を通る渡し方



写真2 ボールを床に水平に動かす渡し方

がり、次のリレーに向けてボールの渡し方を見つけようとする追求意欲にもつながったと考える。グループで課題を解決することができるからこそ、子どもの追求意欲がかき立てられ、グループでの話し合いに深まりが見られた。

・条件B 試行や比較を繰り返し 自分の考えを見つめ直していること

「バランスボールリレー」では、子どもが活動の目的を意識できるようにグループで話し合う場を設定した。また、他のグループと試しのレースをしたり、ストップウォッチを準備して自分のグループのタイムが計れるようにしたりして、いつでも子どもが他と比較できるようにした。試行や比較の仕方はグループに任せることにした。

子どもはいろいろな渡し方を試したり、1レースのタイムの計測や他のグループと試しのレースをして比較したりし始めた。

A児：外回りしすぎて、ボールが渡せない。
B児：渡したらば一つとしないで、渡したら速く動こう。
C児：渡したら内側に動いてみよう。
（動きを試すが、思い通りに動けない。）
A児：うまくなるためには、どうしたらいい？
B児：速くするのだから…
C児：今、コーンの近くを回ったらいいのに、すごく大回りになってしまう。だから、つめた方がいいよ。
A児：カーブのところでつまっているよね。
D児：まわりの動きを予測して動こう。
B児：もどりが遅いから、運ぶのを遅くしよう。
全員：ホイ・ホイ・ホイ…（リズムの確認）
これでやってみよう。
（動きを試すが、渡す順番を間違える。）
A児：順番をしっかり覚えよう
B児：リズムはこのままでいいから、もう一回。
（動きを試すが、渡した後の動き方で失敗する）
D児：（動きで示しながら）ここから行くといい。
C児：（動く場所に連れて行き）ここに動くといい。
A児：もう一回やってみよう。
（動きを試す。成功する。）

資料2 折り返し練習での話し合い

私は、別のグループとレースをしたとき、完全に負けてしまって、私のグループの直さなければいけないことを見つけました。それは、カーブでコーンに沿って並んでおらず、ボールを落としてしまったことです。これを、コーンに沿って、なるべく曲がるようにしたいです。それから、折り返したとき、別の方向にななめで向かっていて、これでは損するので、直したいと思いました。

資料3 試しのレース後の感想

渡し方が決まったグループで、折り返しでもスムーズに動けるように話し合い、何度も折り返しの練習を繰り返しているグループがいた。そのグループでは、動きを試して上手くできなかったところを見つめ直し、よりよい動きになるように話し合っていた（資料2）。何度も練習を繰り返していく中で、言葉では説明するよりも動きで示した方が分かりやすい時には、友達に動きの見本を示したり、一緒に友達と動いたりして、よりよい動き方を追求していた。子どもが目指していた動きができた時は、グループで喜び合っていた。活動の目的を意識して話し合っていたことで、グループでの考えに深まりが見られた。

他のグループと試しのレースをして比較をしていたグループでは、競い合うことでより速い渡し方を追求していた。子どもはレースをすると勝敗にこだわり、目的を忘れてしまうことが多い。しかし、子どもは試しのレースの目的を明確にもっていたため、勝ったグループは渡し方の確実性、負けたグループは渡し方や動き方の改善点（資料3）に着目して、試しのレース後に話し合い、練習を繰り返していた。また、相手のグループの渡し方や体の動かし方も参考にしていた。それは、対戦したグループだけでなく、試しのレースを見ていたグループも参考にしていた。そして、単に速いグループの渡し方を真似るだけでなく、グループでその渡し方を試して、自分のグループに合った渡し方を見付けるグループもいた。

本実践では、グループごとの練習時間の使い方にも変容が見られた。グループごとに比較の必要性や仕方を任せため、先を見通した時間の使い方をするようになってきた。グループごとに活動の計画をたて、課題解決に向けて取り組んでいた。教師が、活動する時間を示すと、試行→比較→見つめ直すという一連のサイクルの目的を意識し、そのサイクルを繰り返すことによって、子どもは集団で思考を深めていったと考えられる。

・条件C 友達の考えを肯定的に受けとめ その考えに反応していること

4月から話し合うことを子どもに意識させ、全教科、道徳、特別活動などにおいて取り組んできた。単に話すことは一人でもできるが、話し合うには相手がいることを子どもに意識させた。ペアや小グループ、全体などさまざまな人数での話し合いを学習の目的に合わせて設定してきた。相手を意識させていく中で、子どもは相手に伝えることを意識して話すようになってきた。それと同時に、聞き手は相手がどんな考えをもっているのかを意識して聞くようになってきた。また、体育科では友達がどのような動きをしているのか意識して見るようになってきた。

「チャレンジ10運動」では個々で運動に取り組んだ。個人のカードには、自分で考えた運動を書き込める欄を2ヶ所設け、動きの工夫ができるようにした。運動の回数を重ねるごとに、友達がどのような動きをしているのか意識する姿が見られた。友達の動きを意識することで、一人一人の動きに変容が見られた。変容が見られた際は、教師は全体にその動きを紹介し、次の運動につながるようにした(写真5)。

特に、バランスボールや平均台などの用具を使った運動では、一人の動きだけでなく、人数を増やした動き方を考え、できる動きが増えていった(写真6, 7)。バランスボールでは、一人でもバランスをとることが始めは難しかったようだが、バランスがとれるようになると、バランスのとり方を工夫し始めた。また、人数を増やした動きを考え始めた。「チャレンジ10運動」では、個々に運動に取り組んでいたため、そのコーナーに集まるメンバーはいつも同じメンバーとは限らない。そこで、人数を増やした動きに挑戦したいと思ったら、自分から相手を見つけて、挑戦するしかなかった。そこには、かかわる必然性があり、相手がどのような動きをしたのかを理解し、一緒に動き方を試さなければならなかった。自分の挑戦したい動きを相手に伝え、その動きを試し、バランスが取れるようになると、自然とかかわりが密になっていた。また、友達の動きを見て、「やってみたい」という思いが出てくると、その動きを友達に教えてもらおう姿も見られた(写真8)。教える側も相手に分かりやすく動きのポイントを伝えていた。そして、教えた相手ができるようになると、教えた側も教えられた側も喜びを感じるとともに、教え合うことのよさも感じていたようであった。



写真5 全体での動きの紹介

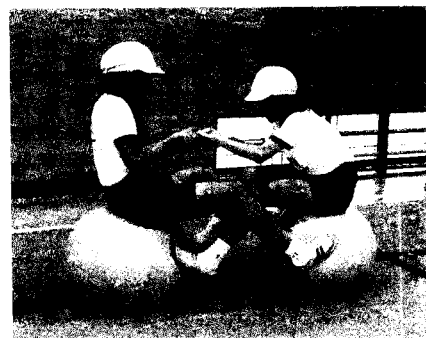


写真6 二人での動き方

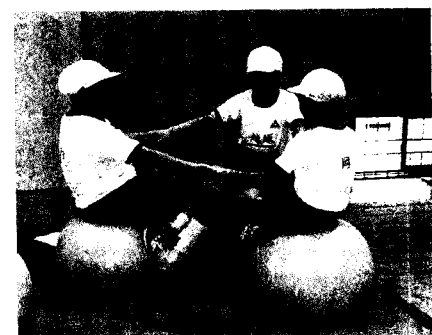


写真7 三人での動き方



写真8 平均台での教え合い

4 今後に向けて

三つの条件を設定して実践を行なってきたが、今後に向けて課題が見えてきた。試行や比較を繰り返すために、ペアやグループ、全体などの形態で授業を行なってきたが、子どもにその形態の目的が意識されていないと、話し合いに深まりが見られないことがあった。目的を意識させなければ、自分の考えをしっかりと持たないままグループになってしまい、友達の考えを聞くだけに終わっていた。それでは、考えの変容もなく深まりも見られない。自分の考えがより深められるようにするため、課題を考慮し、今後の実践を積み重ねていきたい。